

平成30年度 静岡学園中学校・高等学校 自己評価表

本校の教育理念	1. 自主自立の精神 … 自分で考え、判断・決断し、混沌とした社会で自立して生き抜くための「自主、自立の精神の尊重」 2. 共生の精神 … 地球上の全人類が地球規模の課題を協力して解決し、すべての生命がともに生きていくことを願う「共生の精神」の尊重 3. 真理と生命を尊ぶ精神 … 生命の尊厳に対する畏怖の心と人間としての誇りを持ち、私利私欲なく真理を追究し、真摯に社会に貢献しようとする「真理と生命を尊ぶ精神」の尊重 4. 進取の精神 … 新しい時代を見据え、どんな課題が起きても果敢に解決し、進歩させようとする「進取の精神」の尊重
---------	--

本校の教育目標	1. 真のエリートの育成 … 知性・品性・高い倫理観、崇高な使命感を持った真のエリートを育成する 2. 地域社会に貢献できる人材の育成 … 郷土愛と地域愛を育て、様々な形で地域社会に貢献できる人材を育成する 3. 国際社会に貢献できる真のリーダーの育成 … 多様な価値観、幅広い教養とコミュニケーション能力を身につけ、日本文化を理解し、国際社会に貢献できる真のリーダーを育成する
---------	---

教育の特色	これからの未来社会が抱える複雑で解決困難課題を克服できる人材を育成するために、高校には全国初となる「教養科学科」を設置。従来の普通科以上に幅広く、深い知識とともに、領域横断的な視野を身につけ、「自ら考え、論理的に思考・分析し、知識を統合する力を養う。教養科学科として、本校独自の特徴的な専門科目を履修・修得していく。また、外部講師及び本校教員による「シズガク・ゴールデン・タイム(SGT)」は正規の授業ではないが、生徒にとって貴重な学びの機会となっている。その他にも、国際交流をはじめとした多彩な学びのプログラムが用意されている。
-------	---

達成度 A ほぼ達成(8割以上) B 概ね達成(6割以上)
C 変化の兆し(4割以上) D 不十分(4割未満)

学年 教科 分掌	担当	No.	30年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況(重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
学 年	中学部	1	生徒の長所を引き出し、リーダーとしての資質を伸ばす指導を行う。	(ア) 静学祭、体育祭、総合学習や特別活動などにおける集団活動を通して、リーダーとしての資質を養う。学年をまたがる行事や交流活動では、3年生を中心に縦のつながりを作り、下級生は上級生を手本とし、全体を見渡して判断できる視点を育てる。 (イ) 英語教育の充実を図り、3年修了までに英検準2級の取得率7割、2級の取得者10名を目指す。 (ウ) 家庭学習の習慣を身につけさせるため、朝学習や補講などを計画的に行うとともに、きめ細かな学習指導を行う。定期試験前などには計画的な学習を促す。	(ア) クラスでの役割分担に基づいて組織として活動した。(各学年・日常) 朝と帰りのH.Rを日直生徒に行わせている。(中2・日常) (イ) 遠足における集団活動で協力する姿勢を身につけた。 (中1:フジエアドベンチャー、中3:ハーベキュー・5月) (ウ) 体育祭でのパフォーマンスを作り上げる過程でリーダーシップを育てた。(中3・7月～10月)	A
		2	中学部全体で問題点や課題を共有し、統一性を持った指導や対応をする。	(ア) クラス通信を兼ねた中学部の便りを発行する。 (イ) 生徒指導において、問題を抱える生徒に関する情報などを共有し、学年を超えて全教員で対応できるよう、互いに協力を仰ぐ。 (ウ) 学校行事や特別活動の計画を全体で話し合い、協力して実施することで、確実に次年度へ引き継ぐ。	(ア) 中学部会の進行をリズムアップし、生徒の近況を共有する時間をとるようにしている。(日常) (イ) 各学年の担任団で毎日ミーティングを行っている。100%とはいかなくとも、副担任を含めた協力体制をつくっている。 (ウ) 解決すべき課題については行動に移すまでの過程を含めて討議し、速やかに実行した。例えば、新設された中1の教室について、生活の中で出てきた問題点を解決に向かわせた。	A
		3	SGT講座、特別活動を充実させ、広い視野で物事を考え選択する能力を養う。	(ア) 総合学習の時間を活用し、郷土の歴史・文化について理解を深める。 (イ) 生徒全員がスタンドグラス・陶芸・お茶会のSGTに参加、文化・芸術活動を通して社会貢献している人の話を聞く。 (ウ) 生徒の定員増に対応すべく、校外活動やSGT、補講などの計画を見直すとともに、より一層の充実を図る。	(ア) スタンドグラスと和文化を同時展開し、生徒・教員の負担を考慮しつつ実りあるSGTを運営している。(中1) (イ) 1月末～2月初めの自然体験研修(茅野市・車山高原)では、自然とのふれあいだけでなく、現地の方と濃密な時間を過ごせた。(中2) (ウ) 2年目を迎えたハワイ修学旅行では、昨年度の反省に基づき、現地の大学生との交流がより充実した。(中3)	A
	高校1年	4	生徒が安心して通学できるよう、統一性を持った指導や対応をする。	(ア) 孝友日誌や面談を通して生徒との信頼関係を築くとともに、生徒の変化を敏感に察知し、不安や悩みを取り除く努力を怠らない。 (イ) 生徒指導において、問題を抱える生徒に関する情報を共有し、学年全体で対応できる協力態勢をつくる。 (ウ) 不登校や進路変更などの生徒を極力出さず、在籍する生徒全員が心身共に健康に過ごせるように努める。	(ア) 孝友日誌や面談を通して生徒との信頼関係を築くとともに生徒の様子を観察し、養護教諭やカウンセラーとの連携を密にして、生徒の不安や悩みを取り除くよう心がけた。 (イ) 問題を抱える生徒に関する情報を毎回の学年部会で共有し、学年全体で対応できる協力態勢をつくるよう心がけた。保健室教育相談情報共有連絡会での情報交換も有効だった。 (ウ) 不登校や進路変更の生徒を出さないことを具体的な目標としたが、一家転住以外の転学(含予定)が2名、不登校が3名いる。また、12月に授業内で大きな事故があった。再発防止に尽力したい。	C
		5	学習への能動的な取り組みと学力の伸長を促す指導を行う。	(ア) 生徒一人一人が目標を持って学習に励むことができる環境整備に努める。 (イ) 朝テストや週末課題の計画的実施を通して、生徒が自分の成長を実感できるよう工夫する。 (ウ) 外部模試で偏差値54以上の生徒が100人以上であることを目指す。	(ア) 孝友日誌やClassiを利用して学習目標や日々の学習状況を把握し、積極的な声かけが心がかけた。定期テストや模試の振り返りを通して自らの課題を設定、PDCAサイクルの構築を促した。 (イ) 朝テストや週末課題の計画的実施を通して、生徒が自分の成長を実感できるよう工夫した。定期テスト後に各教科から出されたアドバイスを提示、また、教科担任との面談を促した。 (ウ) 外部模試で偏差値54以上の生徒が100人以上であることを目標とした。1月記述模試では54以上が110人だったが、現2,3年に比べると少ない。また、40以下が52人とこれまでに多い。	B
		6	様々な活動に積極的に参加させ、広い視野で物事を捉える能力を養う。	(ア) SGTやボランティア活動など、授業以外の活動に積極的に参加させるよう呼びかける。 (イ) ポートフォリオを活用し、学校行事やテストの振り返りを確実にに行わせる。 (ウ) 緑風塾やLHRの活動を計画的に実施し、広い視野で進路意識を持てるようにする。	(ア) SGTやボランティア活動、海外研修など、授業以外の活動に積極的に参加するよう呼びかけたが、前期に比べ後期は参加者が減り、かつ固定化してしまった。 (イ) 学校行事やテストの振り返りを行うようClassiポートフォリオの活用を促し、積極的に活用した生徒も多かった。年度末には全員がClassi「成果の記録」に入力することができた。 (ウ) 進路希望調査を繰り返し行うことで進路意識を高めたが、自らの将来を考える機会は前期に比べて減ってしまった。緑風塾では一定の成果が得られたが、次年度への課題も多い。	B
	高校2年	7	居心地いい集団	(ア) 一人一人が違う考えを持つことを尊重する。ただし、立派な大人(真のエリート)に成長することを願う点では一致しているようにする。 (イ) 気持ちや情報を伝え合うことができるような間柄を日常において創ることを心掛け、学年団における合意形成には手間を惜しむことなく行う。 (ウ) 仕事を細分化せず、担任・副担任や分掌を超えて仕事を共有し共同で遂行することで、学年団としての絆を深める。	(ア) 一人一人の教員が違う考えを持ち、生徒との人間関係の築き方や問題へのアプローチの仕方はそれぞれ異なるが、立派な大人(真のエリート)に成長することを願う点では一致しているようにする。 (イ) 気持ちや情報を伝え合うことができる間柄を日常において創ることを心掛け、学年団における合意形成には手間を惜しむことなく行う。修学旅行や教科選択などについては、こまめに学年集会を実施。 (ウ) 組織化の美名の下に仕事を細分化せず、担任・副担任や分掌を超えて仕事を共有し、共同で遂行することで、学年団としての絆を深める。副担任のなかには、朝のSHRIに毎日参加する方もいた。	A
		8	授業ファースト	(ア) 生徒指導の基本は毎日の授業。生徒からの信頼は、授業抜きでは獲得できないとの認識を共有して毎日の授業に向かう。 (イ) 教師が起点となり、知的好奇心が生徒に伝播していく授業が理想。必要な授業改善には臆せず取り組む。 (ウ) チャイムと同時に始業できる教育環境は、教員が確保する。	(ア) 生徒指導の基本は、毎時間の授業。生徒からの信頼は、授業抜きでは獲得できないとの認識を共有し、毎日の授業に臨む。球技大会では多くの教員が生徒とゲームを楽しんだ。授業が結んだ絆だと思う。 (イ) 教師が起点となり、知的好奇心(事物や事象に対する教師のワクワク感)が生徒に伝播(感染)していく授業が理想との認識の下、必要な授業改善には臆せず取り組む。遅い時間、教員室では、1時間の授業をどのように組み立てたらいいかについて熱心な議論が交わされていた。 (ウ) チャイムと同時に始業できる教育環境は、教員が確保する。私についていえば、99.9%実行できた。	B
		9	文武両道の継承	(ア) 1年間浪人したとはいえ、在学中は300番台の野球部員が静岡県立大学国際関係学部に入部している。教師が生徒の可能性を限定せず、卒業生が示した可能性のバトンをしっかりと受け取る。 (イ) 模試を前にした補習や振り返り、SGTなどの工夫は、あくまでも授業の補完。とはいえそれを、授業以外の工夫をしないでいい理由にせず、高校生活に前向きに取り組む意欲の核になる学力増進に必要な工夫にも尽力する。 (ウ) 定期試験で、基礎学力を固める。学力が不調な生徒のリストアップをし、学年や顧問と共有する。模試では、高学力の養成を図る。学力が堅調な生徒のリストアップをし、学年や顧問と共有する。それらの結果11月の模試では偏差値54以上100名を目標とする。	(ア) 浪人したとはいえ、在学中300番台の野球部員が静岡県立大学国際関係学部に入部している。今年度は現役の野球部員が筑波大学に合格を果たした。先輩たちが示してくれた可能性のタスキをしっかりと受け取り、後輩に繋ぐようにするという意識を共有する。 (イ) 学力増進には、毎日の一時間の授業がベースとなるが、それ以外の工夫も必要となる。3月には、クラッシーを利用して文、法経商、理工、看護、医歯薬など学部別にグループを作り、それぞれの進路において求められる素養を身につけるため、「読ませておきたい文章」を配信。 (ウ) 集団の学力を引き上げるためには、底上げと同時に最上位層の引き上げが大切になる。Z会の通信添削を介した最上位層の学力増進企画を現在検討中。	B

学 年	高校3年	10	生徒個々の進路設定に合わせた学力を身につけさせ、学年全体の学力の底上げを図る。 国公立大学100名合格の実現。	(ア)週末課題・朝テストを実施し、学習習慣の定着と基礎学力の育成を行う。 (イ)SGTや補講などの積極的参加と自主的な学習活動の啓蒙活動。 (ウ)各種進路行事による生徒の進路意識の高揚。	(ア)週末課題と朝テストの充実で基礎学力定着の基礎固めを狙ったが、やはりペナルティ等を与えるだけでなく、身についたかどうかの検証が必要である。また、生徒との二者面談(時には保護者も含めた三者面談)を頻繁に行い、本人及び保護者の意向を知るとともに、適切な進路指導をの実践を心掛け、入試方法における対策としては、面接と小論文が必要な際の指導の徹底を図った。目標であった国公立大学現役合格100名は、まだ全合格発表が出ていない時点での総括になるが、独自日程試験やAO入試、前期試験では健闘した。しかし、後期日程まで気持ちが整わない生徒やあらかじめ受験予定だった生徒が取り下げ等の理由から想定している受験生を出すことができず、達成不可能の状況の情勢である。ただ、強引な説得による受験はなかったことから、合格者のほとんどは満足感のある入試であったように思われる点では評価できる。 (イ)年間または半期で進路向け放課後講座(SGT・補習)を、各科目別に細分化して行い、受験に必要な学力向上を目指し、成果は上がったと感じる。 (ウ)各種進路行事(保護者対象の進路講演やメンタルトレーニング)で、保護者・生徒の進路意識を高めた。また、土日や長期休暇を含め、自習教室環境の提供及び疑問点解決のための放課後教員室前指導を積極的に行った。	A
		11	教養科学科にふさわしい三つ(志・人間性・知性)の土台を確立させ、人のために役立つ喜びのわかる生徒を育成する。	(ア)クラス正副担任を中心に、教科担当と連携した生徒への声かけや個別面談の実施。学習へのアドバイスや精神的な悩みごとの相談など、生徒の支えとなる指導を行う(「孝友日誌」の有効活用)。 (イ)静学祭などの学校行事を通じて、個々のコミュニケーション能力を高め、クラスの結束を図る。	(ア)クラス担任との個別面談はある程度実施できたが、教科担当との面談がより充実すれば、さらに学力向上に繋がった感がある。今後はこの部分の改善が必要となる。生徒への心のケアに関しては、孝友日誌の活用を主としたかったが、ばらつきがあったのは残念である。しかし、進路に関しての面談や対話は頻繁に行われていて、精神的支えになったケースも多かった。 (イ)学校行事を通じての、個々のコミュニケーション能力を高め、クラスの結束を図るという目的は達せられた。	B
		12	学年団を中心とする、教員全体制作りを目指す。	(ア)担任・副担任の個性を活かし、強い「クラス愛」で、それぞれの絆が生まれる学級運営を行う。 (イ)日頃から教員間で、生徒の情報交換を積極的に行い、生徒の抱える問題を共有して、その解決のために学年団全員で協力して取り組む。	(ア)担任・副担任の個性を活かし、強い「クラス愛」で、それぞれの絆が生まれる学級経営を行うことを目指した。この「クラス愛」は担任や各先生方の思い入れや考え方の違いによって変化するものであり、学年で培っていくようなものではないかもしれないが、もう少し学年団や学年主任としてやれることがあったのではないかと改善の余地の感がある。 (イ)日頃から教員間で、生徒の情報交換を積極的に行うことはできたが、教員の抱えている問題や悩みを共有するところまではいかず、前期末に担任の一人が学校に来れなくなってしまったことは本当に残念なことであると同時に、そうになってしまう前に対処できたのではという無念の思いが残る。	B
教 科	国語	13	自らの目標に向かって主体的に学習に取り組む生徒の育成	(ア)個々の生徒のレベルや要求に応じたきめ細かい指導を1年次から計画的に行う。 (イ)朝テストや週末課題を計画的に実施し、家庭学習の充実を促すための指導を各学年で協力して行う。 (ウ)センター試験の平均得点が、探究系140点、その他の系110点以上になることを目指す。	(ア)上位層に問題集を課したり、下位層を集めて補講を行ったりすることができた。 (イ)各学年で朝テストや週末課題を計画的に実施することができた。 (ウ)探究系140点、その他の系108点と、目標をほぼ達成することができた。	A
		14	効果的な指導方法の開発と授業改善	(ア)活発な言語活動を通して、生徒自らが課題を見付け、主体的に解決する資質や能力を育てる授業を実践する。 (イ)校内校外の研修や研究会に積極的に参加し、新入試や新指導要領に関する情報収集に努める。 (ウ)週一回の教科部会の時間を活用し、教材研究の充実を図るとともに、授業実践や研修の成果を共有する。	(ア)各担当教員がそれぞれに工夫をし、新指導要領の実施に向けた授業改革を意識して取り組むことができた。 (イ)前後期各1回の研究授業で外部講師による助言を受けた。また目的別に複数の研修会に参加することができた。 (ウ)週1度の教科部会を利用して、それぞれの授業進度や教材研究に関する情報を共有することができた。	A
	(地歴・社会) 公民	15	基礎・基本の定着と学力の向上	(ア)「授業第一」とし、各教員の魅力溢れる授業を展開することによって生徒の知的好奇心を喚起し、生徒のやる気、集中力を高める。 (イ)どうして?なぜ?など物事の因果関係を常に生徒に考えさせることによって、暗記からの脱却を図る。 (ウ)生徒の学力に応じた個別指導を積極的に行うことによって、きめ細かな指導を目指し、学力の引き上げを図る。	(ア)日々の授業を中心に教員の個性を生かしながら、それぞれのアプローチで各教科・科目の魅力や伝えらるとともに、生徒の知的好奇心を刺激する指導ができた。科目によっては調べ学習やプレゼンテーションなど生徒自らが主体的に学ぶ機会を設け、実践することができた。 (イ)授業の中で、常に生徒に問いかけながら一方的な講義にならないよう留意して指導することができた。また、定期試験の問題も工夫して作成することができた。 (ウ)教員が放課後等を利用して、積極的に個別指導をする姿が多く見られた。	A
		16	進学実績の向上	(ア)「補講型SGT」をはじめ、特別授業、放課後を活用して演習する機会を設け、応用力、実戦力を身に付ける。 (イ)生徒の志望(国公立2次対策・難関私大対策など)に応じた個別指導を積極的に行うことによって、進路実現を図る。	(ア)授業を前提にそれを補完し、かつ演習機会を増やし、生徒の応用力・実践力をつけることができた。現在、地歴・公民科において欠かせない取り組みとなっている。 (イ)センター試験対策・国公立二次対策・私大対策など、生徒のニーズに応じた取り組みができ、入試結果に反映することができた。	A
		17	教科指導力の向上及び大学入試改革・指導要領改訂への対応	(ア)大学入試改革、指導要領改訂を見据え、外部研修会への積極的参加など情報収集を行い、教科内での情報の共有化と検討を重ねる。また、資料の読解・活用の力を育成することを強く意識した授業・試験を実施する。 (イ)活発な情報・意見交換によって各教員の持つ知識、経験や技術を共有する。 (ウ)新人・若手教員を育成するため、研究授業やサポートを積極的に行う。	(ア)(イ)まだまだ分からない事も正直多いが、積極的な研修参加と情報収集が進んでいる。進路部と協力しながら更なる情報収集に努めたい。少しずつではあるが、新しい取り組みが始まっており、教科内で経験や技術を継続して共有したい。 (ウ)科目内で中心となる指導教員がおり、新人・若手に対して手厚いサポートができた。	B
	数学	18	自ら学ぶ意識を持ち、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。(指導に関する事柄)	(ア)高校においては「授業」「週末課題」「朝テスト」、中学においてはそれに対応する教育内容の「運動」を強く意識し、実践する。 (イ)個々の生徒のレベルに応じた、きめ細かい指導を実践するため、「問題集」と「参考書」の選定と活用法を議論する。 (ウ)生徒に数学の面白さを認識させ、生徒の探究心を高める内容豊富な授業を実践するため、教材や授業展開などの工夫について研究授業などを通じて情報交換をする。	(ア)高校では「運動」を意識した指導がかなり定着してきた。中学においては各学年で工夫して、授業→朝テスト→定期テストを意識した指導ができた。特に1年生は朝テストの成績不良者を毎回残して指導できた。 (イ)高校では今年度も問題集と参考書選定についてははっきりした結論が出なかった。解決中学では、「体系数学」のテキストを利用して、2年間で効率よく中学課程を終わらせるノウハウが蓄積されてきた。 (ウ)研究授業を最後まで参観する先生が非常に多く、意識の高さが感じられた。その後の検討会においても活発な意見が出てくるが多かった。中学では1人1人の学習レベルを細かくつかむことで、生徒のレベルにあった授業が展開できた。	A
		19	教員の教科観の統一、授業内容・指導方法・評価方法を検討する場として、教科部会を機能させる。(組織に関する事柄)	(ア)教科部会を議論の場とするため、事前にメールを用いてそれぞれの教員の意見・提案・検討事項を収集する。それを、教科主任が教科部会を開く前に議題や提案事項に対するお互いの意見を予め整理したものをメール配信する。教科部会を開く段階ではお互いの意見の要旨がわかった状態にしておき、すぐに意見交換ができるようにする。 (イ)教科部会において指導方法・課題の出し方・課題の取りまとめ方・評価方法の工夫の取り組みを発表し、興味深い事例を共有する。 (ウ)各学年での取り組みの情報交換・情報共有を行い、教養科学科の数学科としての指導方針「静学メソッド」を確立する。	(ア)事前連絡を欠かさず行なうことができた。ただし、検討事項の事前収集についてはあまりうまくいかなかった。 (イ)今年度から評価方法が変更になったが、数学科の教員全員で、全ての科目について確実に確認できた。出張した先生方はその内容をメールを利用して他の先生に素早く情報提供できた。 (ウ)高校では木曜2限を利用して定期的に情報交換ができた。中学では日常から雑談を交えて情報交換ができた。	B
20		新入試に求められる思考力の育成	(ア)授業において主体的に学ぶ機会を増やす。 (イ)実施する実験を精査し、考察する姿勢と現象を理解する力を育成する。 (ウ)思考型問題の作成を進め、授業や定期試験などで実施する。	(ア)増加傾向にあるが、その方法については今後も開発を進める必要がある。 (イ)実験分野の精査はなされた。今後は実験手法の開発を進めていく。 (ウ)定期試験の中で実施することができた。	B	
21		薬品の管理体制の強化	(ア)実験精査を受けた薬品の補充および破棄を迅速に行う。 (イ)今年度から新たに変わった薬品管理の方法を徹底する。 (ウ)年間に実施する薬品の定期点検回数を増やす。	(ア)補充は滞りなく行えた。次年度は破棄手続きを進めていく。 (イ)各教員が管理方法を把握し、書き漏らしがほとんどない状態で一年を終えることができた。 (ウ)年間3回の一斉点検を行うことができた。	A	
22		生徒の学力向上のため、組織的な指導体制を確立させる。	(ア)センター試験の平均点を探究系は140点、一般クラスは120点を目標とする。 (イ)高校3年間を見据えた進捗調整を行う。また、定期試験の範囲を2週間前に提示することを徹底する。 (ウ)GTECを12月1日(土)に高校1年生と2年生全員に受験させる。進路課と連携を取りながら運営を行う。	(ア)探究系は平均点が150点を超え、近年では最もよい結果を出すことができた。一般クラスも120点を超えることができた。 (イ)高校1年生の進捗を調整し、1年半で文法を一通り終える計画とした。高校2、3年生については変更はない。進捗調整はうまくいっている。 (ウ)今年度初めてGTECの公開受験を校内実施した。多くの先生方にご迷惑をかけたが、問題なく実施することができた。	A	
英語	23	各学年部における情報交換を活発にし、その情報を英語科全体で共有する。	(ア)木曜日に行われる教科会議にて、各学年部で進捗や指導法の議論をする場を設ける。その内容を月例の教科部会にて共有する。 (イ)平常点の内容について学年部ごとにガイドラインを作り、共有する。	(ア)木曜日の教科会議は各学年部での分科会とした。新年度は、新テストに向けた指導体制の議論の場としていきたい。 (イ)例年の形で通り実行できた。	B	
	24	大学入試改革についての情報収集を進め、高校1年生の指導に取り入れる。	(ア)新テストに向けた対策チームを作り、情報収集と指導方法について議論をする。 (イ)12月1日(土)に行われるGTEC 4技能試験に向けた対策について議論する。 (ウ)議論した内容を元に、高校1年生と2年生をターゲットに、実践的な指導方法の改善を試みる。	(ア)オンライン英会話の導入に向けた環境作りを進めた。現状、課題が何点が見えており、新年度は7月までには環境整備を終えたい。 (イ)去年のGTEC結果から、本校生はスピーキングとリスニングに弱さがある。高校1年部ではリスニング、ライティング指導の、高校2年部ではスピーキング指導の実践を主なタスクとして取り組んだ。現環境の中では十分な成果は得られていない。 (ウ)「英語4技能試験へのアプローチ」という教材を購入させ、運用を試みた。スピーキング練習で、やはり期待するような指導ができなかった。生徒同士の英会話には限界があることを知った。議論の結果、オンラインスピーキングを導入することとなった。	B	

教 科	保 体	25	授業計画にそって共通理解の中、生徒の運動能力・体力の向上に努める。	(ア)各種目の授業の充実を図る。各集団に合わせた授業計画や展開を工夫する。 (イ)種目を偏らせることなく様々な競技に触れる機会を持たせる。 (ウ)施設の中の問題点を早めに発見し、事故のない授業を目指す。	(ア)それぞれの集団の雰囲気・能力に合わせた授業を展開するだけでなく、その種目のレベルアップとともに満足度や体力の向上につながるメニューを考案し実践することができた。 (イ)施設や用具の都合上、どうしても偏ってしまう傾向があった。来年度以降はもっとバランスよくおこなってきたい。 (ウ)グラウンド人工芝の劣化が激しく補修をして欲しい箇所がある。また、施設の面だけでなく大きな事故につながるものが、今後ないよう授業内容や授業展開、用具の取り扱いについての安全策を検討した。	B	
		26	新体力テストで優良校に入れるよう授業内での基礎体力づくりを充実させる。 (男女ともに昨年逃した優良校入りをを目指す)	(ア)日常的に新体力テストの種目に合致する基礎メニューをおこなう。(ボール投げ・握力・持久走) (イ)生涯にわたる健康管理の観点から、バランスの取れた身体づくりをおこなう。 (ウ)4・5月に新体力テストを授業中に実施し、現状を理解させ、秋までに苦手種目の向上を図る。	(ア)各担当がをもとに新体力テストの苦手種目克服のためのメニューを考え、授業の準備運動、補強運動に取り入れることができた。 (イ)成長期である生徒達の体力向上のために、各種目だけでなく柔軟運動や筋力トレーニングも徹底することができた。 (ウ)春から記録が伸びた生徒もいたが、部活を引退した3年生の記録が落ちる傾向があった。本年度も優良校入りができず、取り組みの改善が必要。	B	
		27	授業だけでなく日常生活での挨拶など、礼節を重んじる姿勢を身につけさせる。	体育の授業のみならず日常の生活で活かされる礼節を身につけさせる。(服装・挨拶・態度の徹底)	授業開始、終了時には整列・挨拶を徹底することができた。また、学校生活においては概ね挨拶においてはよかったが、服装や身だしなみなど甘くなってしまった部分もあった。	B	
		28	生徒がお互いにすすんで協力、助け合うことを身に付けさせる。	(ア)運動技能の習得過程を互いに協力しておこなう教材の工夫 (イ)運動能力だけの評価にならないよう生徒の観察・指導をおこなう。 (ウ)見学者には授業見学シートの記入を義務付け、授業内容の理解と観察を促す。	(ア)各集団の運動技能や雰囲気、意欲などが違う中、各担当が創意工夫し技術向上につながるメニューを考案したり、助言したり、生徒同士がお互いを思いやり、高めあう環境づくりができた。 (イ)授業態度や準備片付けの積極性、仲間との協調性など多角的に観察・指導することができた。 (ウ)シートを記入させることで授業をしっかり観察し、その授業の内容を理解するだけでなく注意点や重要点を把握し、次回以降の授業につなげることができた。	A	
		29	教科書の上から、自らが実践に移せるように知識の定着を図る。	(ア)日常生活における健康への意識を高め、自己健康管理を実践させる。 (イ)運動だけではない体づくりの基本(食事・睡眠など)を理解させ実践させる。 (ウ)自己実現の方法を理解し実践させる。(人生の目標づくりの助け) (エ)より身近な具体的問題として認識し、交通安全への配慮の実践。 (オ)AEDの使用法をマスターし、人命救助への知識と行動力を養う。 (カ)地球環境保護の実践。(節電、ごみの分別・減量など)	(ア)各項目の内容を自分の実生活の健康づくりにシクロさせて、フィットさせることができた。 (イ)健康的な身体を作るために必要な要素を理解させ、それを実生活の中にとり入れていくかを実践させた。 (ウ)自分の目標や夢に向かってのプロセスを理解させ、達成のための第一歩を踏み出させることができた。 (エ)交通事故の悲惨さを理解させるとともに、自転車の安全運転の徹底をはかることができた。 (オ)AEDや心臓蘇生法の実技テストをおこなうことで、使用法ややり方を徹底させることができた。 (カ)レポート課題を出し、今自分に出来る環境保護のから、地球規模の環境保護まで幅広く理解させることができた。	A	
	家 庭	30	授業を通して生活者としての問題意識を持たせ、広い視野に立つてものごとを見る姿勢を身につけさせる。	(ア)グループディスカッション、発表を通して意見交換させながら、各自の考えをより深めさせる。授業前と授業後のふり返りを確認をする。 (イ)幼稚園見学実習、高齢者福祉施設の見学、インタビューなど、人の一生のプロセスに関わる体験的学習の場をつくる。レポート課題の提出。 (ウ)生徒の参加型授業作りについての情報交換、研修会への参加を積極的にする。	(ア)家族・家庭、保育、高齢者の単元は現状抱える問題点についてディスカッションを取り入れたが、授業前後のふり返りは十分にできなかった。 (イ)高齢者福祉施設の見学は実施できなかった。高齢者インタビューのレポート課題は熱心に取り組み、生徒ひとりひとり自分の人生を見つめる目を持ってたようだ。 (ウ)時間のやりくりが出来ずに研修会に積極的に参加できなかった。教科内ではなるべく情報交換に努めた。	B	
		31	実技・実習を通して生活的自立のスキルを身につけ、協働の力を育む。また、ものづくりの喜びを知らせる。	(ア)だしの授業(高校1年11月)、和食のマナー(中学3年9月)の実施。作業時短を取り入れた調理実習の工夫(高校1年、中学2年、中学3年)。 (イ)エプロン製作(高校1年:調理実習で活用)ランチョンマットの染色(中2:和食のマナーで活用)綿花の栽培(中1:綿を紡ぐ体験) (ウ)幼稚園見学実習(高校1年7月)。絵本の読みきかせと保育実習(中3:10月)。	(ア)予定していた授業はすべて問題なく実施できた。時短調理を意識した調理実習は年々改善を取り入れることができてきている。 (イ)中1の被服材料の学習としての綿花の栽培で綿を実際に紡ぐところまでは実習できなかった。 (ウ)幼稚園実習が暑い時期の実施で受け入れの幼稚園側には保育内容の調整をして頂くことになってしまった。準備段階での情報交換が足りなかったことが反省点である。中3の保育実習は予想以上に実りのあるものだった。	B	
		32	生徒が充実して実習、製作に取り組めるように実習室の環境を整える。	(ア)備品の整備、点検、補充。(包丁の手入れ、消耗品の補充を毎月末。ミシンの整備点検5月、6月、9月。備品の購入をできるだけ前期までに計画的に行う。) (イ)調理実習室の衛生管理(まな板の確認、引き出し内のチェック、冷蔵庫内の整理を毎月末) (ウ)技術家庭科実習室の用具、教材の整理。生徒作品の管理の徹底。	(ア)いざ実習授業が立て込むと備品、用具の点検は定期的にはできなかった。ミシンの整備点検だけは、前半後半の区切りの実習クラスで実施できた。点検、引き継ぎの連絡ノートを用意して不具合に対応していくことも検討したい。 (イ)調理室の衛生管理については実習日ごとに毎回担当者が点検できていたもので問題はなかった。 (ウ)技術家庭科実習室の使用状況が高校、中学、SGTで混み合っていたもあり、なかなか管理できなかった。次年度は事前に使用計画を立て、途中の管理をしやすくしていきたい。	B	
	芸 術 (音 楽)	33	生徒が主体的になり、音楽的な活動に参加することができる。	(ア)単元によって発表の機会を与えることによって、他人に見せるためのプレゼンテーションやクオリティを考えながら取り組むよう伝える。 (イ)生徒が活動に参加しやすいよう、動線を考えた座席の配置、活動範囲を音楽室及び体育館ステージ等具体的にイメージしやすい場所を使用するようにする。 (ウ)教師は、生徒自ら考えるきっかけになる発問をし、それ以外はなるべく見守るようにする。	(ア)合唱コンクールで校内発表をしたり、グループを作り授業内で発表しあうことを行った。 (イ)音楽室入室から楽器等の教具をドア付近にもっていき、スムーズな動線を意識した配置にした。 (ウ)グループワークの前に、互いのパートが聴きあえるよう一通りどのパートも経験したうえでグループワークを行った。	C	
		34	生涯において音楽に親しんでいく素養、姿勢を築いていくことができる。	(ア)生徒が親しみやすい題材から、専門的な内容へと題材を変遷するよう設定する。 (イ)具体的な音楽へのかかわり方を提示し、歌ったり楽器を演奏したり様々な形で体験できるようにする。	(ア)テレビCMで聞いたことのある曲を題材として設定し、経験した後に同じ題材でより専門的な曲を用いて活動を行った。 (イ)1つの題材に対して、歌唱や器楽等様々な音楽のかかわり方を提示し、様々な活動の選択肢を提示した。	A	
		35	音楽の基本的な知識、技能や音楽を通じて様々な国の文化を知ることができる。	(ア)取り上げた音楽の題材が、その国の文化や歴史にどのような関係性があるのかを度々伝える。 (イ)知識を、身体を動かしたり体験したりすることで、身をもってわかるようにする。	(ア)単元ごと授業のはじめに説明したり、原語での表現の仕方を伝えたりして、その国が意識できるようにした。 (イ)ハンドクラップや指揮をすることで、リズムや拍子を体験できるようにした。	C	
	情 報	36	生徒一人一人の好奇心を高め社会のリーダーとしての人材育成に必要な情報機器を、表計算による統計処理や情報整理、プレゼンテーションによる表現の道具として適切に活用できるように育成する。	(ア)中学までの習得状況に差があるので、全体のスキルの底上げができるよう丁寧に説明する。 (イ)小中の学習を基礎に、身近な事例をもとに情報に関する応用力を育てる。 (ウ)全体的イメージを図版やイラスト・アニメーションを用い興味を持てる学習に心がける。	(ア)丁寧に説明し、繰り返し実習することによりワープロ、表計算、プレゼンテーションについては、実習を通じて、技術の習得ができた。 (イ)生徒ごと、興味のある内容についてスライドを作り、発表することができた。 (ウ)スライド、ビデオ教材などを用いながら、実習を行い興味を引き出すことができた。	A	
		37	情報の収集・処理・表現を通して広くコミュニケーション能力を養い情報社会に積極的に参画する態度を育てる。	(ア)情報の収集、処理、発信の基礎的な知識の習得およびマナーとルールを周知させ、法律についても触れる。 (イ)法律については実例についても取り上げ、何が問題なのかどのように対応すればよいのか考えさせる。	(ア)情報機器を用いた時のマナー違反、や法律に触れる内容について実際のニュースを見ながら解説ができた (イ)著作権法、不正アクセス禁止法など実際の犯罪例を元に問題点、対応方法について考えることができた。	B	
	分 掌	教 務 部 教 務 課	38	教務課から全教員への周知事項を徹底し、全教員が共通認識を持って教育活動を行ない、教育活動の円滑な推進を図る。	(ア)定期試験の実施方法やルールなど、全教員が共通認識を持つため明文化したものを作成し、その時期に応じて随時情報発信を行うことで、全教員が共通認識を持って教育活動を行えるような体制を整える。 (イ)常に新任の先生の目線で、いつ・どこで・何を・どのように教育活動を行うのかを明確化できるように教務課から全教員に情報を発信する。 (ウ)情報の発信方法としてはメールを中心として、補助的にSchoolPadやClassiも併用する。ただし、様子を見ながら周知徹底ができるものを模索する。	(ア)毎朝7:30に集合し、時間割変更の確認、代講の確認と配当を行い、全教職員に代講表と教務からのお知らせをメール送信を行った。 (イ)成績処理など、その時期に応じたスケジュールと方法や内容をわかりやすくメールとSchoolPadで周知を図った。	B
			39	教務課の業務の精選と効率化を図る。	(ア)教育現場からのさまざまな意見や要望を反映させた結果、教務課の業務が複雑になっている。このため、従来通り徹底すべき点と見直す点を検討し、見直す点については代替案を出す。 (イ)教務課の業務の煩雑化が、教務課員の気持ちの余裕を減少させているため、本来の教務課としての業務のミスを誘発させないように業務の効率化と確認体制を整える。 (ウ)現在の教務課の業務の質を下げずに、業務の精選と効率化のために業務内容を工夫する。その結果として教務課員にも気持ちの余裕ができ、生徒への教育活動をさらに充実させる。	(ア)特別授業の時間割をこれまでの紙ベースによる作成方法から、時間割作成ソフトを使用しパソコンのみで作成する方法に変更し、効率化を図った。年間の時間割もパソコンのみで作成する計画を立てた。 (イ)成績(評価)のつけ方を本年度から変更するに当たり、成績をつけやすいようなエクセルシートを作成し、数値の入力と同時に成績の区切りが可視化できるように工夫した。来年度は、さらに改良を加える予定である。	B
			40	ボトムアップ型で教務課として教育現場の改善を提案する。	(ア)新任の教員の目線、新任の教務課員の目線で、教育現場の改善の提案とそのために教務課として何をすべきかを検討する。 (イ)改善すべき内容や検討内容をボトムアップ型で提案し、教育活動の充実を図る。 (ウ)ボトムアップ型の結果として、教育現場の意見を反映させ、信頼される学校づくりにつなげる。	(ア)分掌会議を通じて、特別授業のあり方、3学期制への移行、定期試験、出張や休暇に伴う時間割変更・代講についての問題点についてなどを検討し、教務部長に報告した。 (イ)備品の補充の効率化のため、備品が不足している物を発注しやすいように備品リストと兼ねた発注シートを作成した。	C

分	教務部	企画課	41	行事予定の見直しと発信方法について検討・提案を行う。	(ア)年間の各行事が効率的かつ教育的意図に基づいて記列されているか検証し、来年度の予定作成に反映する。 (イ)行事に関する情報(保護者や地域の方々向けの連絡や案内)を発信する時期や内容、発信方法などについて検討・提案を行う。	(ア)各行事が終わる度に、アンケートや各種委員会(会議)を通じて来年度の同じ行事の期日や日程を検討し、行事予定作成に反映させることができた。 (イ)来年度以降の長期休暇中の特別授業の在り方について各部署に検討を投げかけ、返ってきた意見を集約し、現状に合った変更を示すことができた。 (ウ)2020年度に三期制を敷くため準備を進めている。企画課と後期ワーキンググループで作成した年間行事予定(案)を各部署(各会議)を通じて、全職員に示していく。(継続中)	A
			42	カリキュラム(教育課程)改訂に向けた準備を進める。	(ア)研修会に参加するなど情報収集に努め、カリキュラム改訂に向けたスケジュール作りを進める。 (イ)得られた情報を各教科に発信し、改訂に向けた体勢を整えてもらう。	(ア)各種研修会にて得た情報をまとめ、新学習指導要領に則った教育課程作成のスケジュールを各教科に示すことができた。 (イ)アを受け、各教科において新学習指導要領に則った科目の設定・配列などの検討(その準備も含め)に入ってもらっている。(継続中) (ウ)ここ数年の懸案であった「系の見直し」について、後期ワーキンググループの協力を得ながら、変更案を提出することができた。	A
		国際交流課	43	国際交流プログラムを活性化させ、生徒に様々な機会を提供する。	(ア)受入れ事業を安定させるために、ホストファミリーバンクへの登録を各学年20名以上確保する。 (イ)派遣事業における宣伝や説明等を強化し、希望者を確保する。 (ウ)英会話を学べる機会を確保するためのSGT等の充実。	(ア)派遣ではJWACS研修をオーストラリアにて、優秀生徒派遣をニュージーランドにて、緑城研修を中国にて、計画通り実行することができた。 (イ)受入れでは、JWACS、緑城育華学校の2校を受入れ、ホームステイをしながらの国債交流を実施することができた。 (ウ)今年度より、トビタテ!留学JAPANのプログラムに1名参加することができた。また、その生徒に留学経験を全校生徒と共有するためにスピーチをしてもらい、次年度の応募者が5名に倍増した。	A
			44	中・長期留学生へのケアの充実。	(ア)ALTによる中・長期留学生の日本語指導。 (イ)中・長期留学生への月1回のインタビューを通して、諸問題を一緒に解決する。	(ア)ALTに週1回の日本語指導をお願いすると共に、悩み等の相談にのってもらった。 (イ)担任から、留学生のクラスでの様子を聞いた。	C
			45	スケジュールの視覚化と業務の共有。	(ア)校内ネットワークを使用し、国際交流課作成の文書の共有。 (イ)分掌会議がなくても、課員間でしっかりとコミュニケーションを取り合う。	(ア)全校公開で文書を共有している。生徒に対しては、入学オリエンテーションで紹介した。 (イ)各行事前に国際交流課の打ち合わせをし、業務の分担をした。	B
	生活部	生徒指導課	46	生徒の自主性、主体性の育成を目指した生徒指導。	(ア)生徒会活動への指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 (イ)風紀委員による呼びかけ・見回り等を行い、生徒同士で直し合う雰囲気づくり。 (ウ)生徒会活動・部活動の活動や大会・発表会のアナウンスを積極的にに行い生徒会・運動部による自主的活動を奨励する。	(ア)生徒会活動への指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む →積極的な指導には至っていない 50%(B) (イ)風紀委員による呼びかけ・見回り等を行い、生徒同士により直しあう雰囲気づくり →委員会の指導を通して実行中 60%(B) (ウ)生徒会活動・部活動の活動内容や、大会・発表会の日時や結果のアナウンスを積極的にに行い、生徒会活動・部活動を通して、生徒の自主的活動を支援する →昼の放送などを通してアナウンスを実施した 60%(B)	B
			47	学校生活における基本的な生活習慣の改善サポート。	(ア)ルールの可視化・明確化、風紀委員のをより活発に行い、生活習慣の改善を促す。 (イ)登校指導による交通指導・声かけ運動の継続、学校周辺の見回りにより、学校生活に対する基本的な生活習慣の基盤、安全を確立する。 (ウ)静地研・校外教育連盟等を通じた、他校・外部団体・警察との連携体制を構築する。	(ア)ルールの可視化・明確化と、風紀委員会活動の活性化により、生徒の生活習慣の改善を促す →各クラスごとにイラスト入りの「制服着こなしガイド」「自転車の交通ルール」等を掲示 90%(A) (イ)登校指導による交通指導ならびに声かけ運動の継続、学校周辺の見回りにより、学校生活における安全基盤を確立する →交通指導係・生活部長を中心にほぼ毎日実施 90%(A) (ウ)静地研・校外教育連盟等への参加により、他校・地方自治体を含む外部団体・警察との連携を構築する →自治体・町内会との連携はまだ不十分な状況 50%(B)	A
		保健衛生課	48	健康生活に必要な自立的態度と、健康増進をはかる生活習慣の育成	(ア)視力検査、心電図・貧血検査、歯科検診、眼科検診、内科・運動期間検診、耳鼻科検診などの健康診断の実施(4月～5月中心) (イ)上記健康診断と、日常のかんさつにより生徒の心身における健康状態の把握(随時実施) (ウ)健康管理上必要な指導・助言の実施(随時実施)	(ア)視力検査、心電図・貧血検査、歯科検診、眼科検診、内科・運動器官検診、耳鼻科検診などの健康診断の実施(4月～5月中心) →滞りなく実施 100%(A) (イ)上記、健康診断と日常の観察により、生徒の心身における健康状態の把握(随時実施) →よく把握出来ている 80%(A) (ウ)健康管理上必要な指導・助言の実施(随時実施) →よく実施出来ている 80%(A)	A
			49	感染症の予防及び対策	(ア)インフルエンザ等の流行時期に備え、毎月発行する「保健だより」や関連ポスター掲示による注意喚起の実施(11月～3月中心に実施) (イ)生徒会保健委員会の活動を通じての、啓発措置及び予防措置の実施 (ウ)流行時、職員室前の掲示板を使つての各クラス感染状況の公表及び手洗い洗浄剤の設置(感染症流行時)	(ア)インフルエンザ流行の時期に備え、毎月発行する「保健だより」や関連ポスター掲示による注意喚起の実施(11月～3月中心に実施) →実施出来ていた 80%(A) (イ)生徒会保健委員会の活動を通じての、啓発活動及び予防措置の実施 →よく実施出来た 90%(A) (ウ)流行時、職員室前の掲示板を使つての各クラス感染状況の公表及び、手洗い洗浄剤の設置(感染症流行時) →滞りなく実施した 90%(A)	A
			50	教育相談の充実	(ア)「こころの健康実態調査」(5月中実施)こころに問題を抱えた生徒を把握し、個別面接を実施する(6月～7月) (イ)毎月の学年主任者会に養護教員を派遣し、高校学年・中学部の情報共有を発展させる。教育相談係が、問題を持った生徒取りまとめ、スクールカウンセラーとの連携に努める。 (ウ)スクールカウンセラーが不在の月・水・木には、保健衛生課教員が当番制により生徒相談室にて教育相談にあたる(夏・冬・春休み中を除く月・水・木の昼休み)	(ア)「こころの健康実態調査」(5月中旬実施)により、こころに問題を抱えた生徒を把握し、個別面接を実施する(6月～7月) →滞りなく実施出来たが継続指導・相談が必要な生徒も残った 80%(A) (イ)毎月の学年主任者会に養護教員を派遣し、高校学年部・中学部との情報共有を発展させると共に、教育相談の係が問題を抱えた生徒を取り纏め、スクールカウンセラーとの連携に努める →毎週各学年部・中学部との連絡会を実施、情報共有に成功した 90%(A) (ウ)スクールカウンセラー不在の月・水・木には、保健衛生課教員が当番制により、生徒相談室にて生徒の教育相談にあたる(夏・冬・春休み中を除く月・水・木の昼休み) →実施してはみたが相談に来る生徒は殆どいなかった 20%(C)	B
	安全整備課	51	学校施設の日常時・非常時における防災安全体制の構築	(ア)新しい地震防災・災害応急対策計画(地震対策マニュアル)の運用 (イ)防災倉庫内の整理 (ウ)周辺町内会・ヤタローなどの防災協定の捜索 (エ)一斉メールの利用促進も含めた、災害への対応 (オ)日常生活の安全を図るための、校内ハザードマップの修正 (カ)訓練の充実などによる上記条項の教職員・生徒への認識徹底 (キ)クラッシーの機能利用による新たな連絡方法・生存確認への利用検討	(ア)新しい地震防災・災害対策計画(地震対策マニュアル)の運用及び、防災倉庫の管理 →防災計画の修正を元に変更の確認と修正中 10%(C) (イ)一斉メールの利用促進も含めた災害への対応 →classiの活用を含め検討中 20%(C) (ウ)訓練の充実による上記条項の教職員生徒への認識徹底 →訓練を年3回の実施に変更しさらに内容も見直した 50%(B)	C	
		52	公共心・ボランティア精神の育成、校舎内外の保全、美観の維持	(ア)生徒環境委員会の運営 (イ)校内外の清掃計画の指導と、清掃用具の補充、入れ替え (ウ)ロッカー・机・椅子等の管理(机椅子に関して変更入れ替え検討) (エ)職員室・教科資料室の整備 (オ)傘立ての変更、貸し出し傘の運用検討	(ア)生徒環境委員会の運営 →文化祭・体育祭において積極的に活動出来た …90%(B) (イ)校内外の清掃計画の指導と、清掃用具の補充、入れ替え及び、ロッカー・机・椅子等の管理 →不自由させることなく補充出来た 100%(A) (ウ)傘立ての変更、貸し出し傘の運用の検討 →貸し出しは再開出来たが、傘立ては検討中 50%(A)	B	
	進路部	進路企画課	53	進路シラバスに基づいた志を高める進路指導計画の実践と進路指導室の活用促進。	(ア)各進路行事の目的を、学年部所属教員を通じて生徒に周知し、進路実現ストーリーのどの段階の取り組みなのかの意識付けを行う。 (イ)「自学自習」「自調自考」を促すような企画、志を高める進路指導計画になっているか点検し、シラバスの改善に繋げる。 (ウ)進路指導室に来室する生徒の相談に積極的に応じ、進路実現をサポートする。	(ア)前期には、教職員対象に進路シラバスを配信して意識向上を図った。一年を通し、特に高3生の指導は、シラバスに基づき模試などの進路行事を遂行した。 (イ)進路指導室における進路相談は、前期、後期ともに増加した。 (ウ)高3生が家庭研修に入つて以降は、いつでも進路指導室を利用できるように2人体制で朝8時30分から午後7時まで進路指導室を開室し利便性を向上させた。	B
			54	テスト分析力の向上とフィードバックの仕組みの構築。	(ア)学年部との連絡を密にし、可能な限り他学年所属の教科担任も参加したテスト分析会を企画、実施する。 (イ)ファインシステムの活用や進路カルテなどで教員および生徒に振り返りの機会を準備し、クラッシー活用を促す。	(ア)前期には、ベネッセ分析会を1回実施。後期には、できるだけテスト毎に分析会を実施することとし、10月にスタディサポート分析会を、12月には進研学カテストの分析会の実施をベネッセに打診し実現した。 (イ)前期にはベネッセのオンラインシステムについての教員研修を実施した。また、9月スタディサポートの際には、生徒向けの進路講座を実施し、生徒本人によるテスト分析とフィードバックの重要性を学ばせた。 (ウ)センター試験後にベネッセ、河合塾が実施する国公立出願指導研究会の出席には、ベテラン教員と若手教員にペアを組んでもらい、若手教員の指導力向上の場とした。	A
			55	大学入試改革の情報収集と進路指導計画への迅速な対応。	(ア)「大学入学共通テスト」「高校生のための学びの基礎診断」に関する研究会には積極的に出席し、情報収集に努める。 (イ)大学入試改革について得られた情報は、迅速に全教職員に周知徹底を図り、進路指導計画にも速やかに反映させる。	(ア)30年度大学入学共通テスト試行調査(プレテスト)の参加を申し込み、主体的に希望した高2生徒約80名が受験し、自らの受験のために新しい傾向を探る機会となった。 (イ)前期に引き続き、ベネッセや駿台予備学校、河合塾等からの入試改革関連情報の収集と全教職員への情報提供とを行った。 (ウ)英語4技能に加え、入試に小論文を課す大学が増える傾向にあることを掴み、研修開発部と連携して教員全体研修で小論文の指導研修を企画した。	A

分	進路部	進路指導課	56	進路シラバスに基づいた進路行事、進路指導の実施。	(ア)学年部と連絡を密にして進路行事を効果的に実施し、生徒の進路意識を高める。 (イ)メンタルトレーニング講座を実施するなど、生徒の進路実現にむけて多方面からのバックアップを行う。 (ウ)行事の有効性についての検証を行い、企画課にフィードバックする。	(ア)高1・高2は春秋の2回、高3は春にスタディサポートを実施した。高1・高2は7月・11月・1月に進研学カテストを、高3は6月以降の各月に進研模試や河合塾の模擬試験を実施し結果の分析を行った。 (イ)高1・2年において夏休み明けに静学テスト(4教科課題テスト)を実施し、高1年は2月に静学テスト(5教科実カテスト)を実施した。高3については4月にセンター形式の静学テストを実施した。 (ウ)高1では文理選択を目標としたプログラムを実施した。5月にマイナビキャリアガイダンス、8月にRcap、12月に小論文ガイダンスを実施した。高2では5月・11月に小論文ガイダンスを実施した。	B
			57	大学進学の数値目標を達成する。	(ア)補講系SGTを効果的に実施するとともに、高校3年生の夏期・冬期特別授業中の補講や家庭研修中補講の充実を図る。 (イ)外部教材を有効に活用して、生徒の学力、モチベーションの向上を図る。 (ウ)進路カルテやクラッシーを活用し、生徒の学習効果を高める。	(ア)4月から高3の受験対策を中心とした補講系SGTを計画し、実施した。 (イ)高3の受験対策講座である夏期・冬期特別授業中の午後補講を、一部に代々木ゼミナールのサテライン講座を利用しながら実施した。また、家庭研修中補講を実施した。 (ウ)5月、11月に高2小論文指導を実施し、高3では受験に対する小論文個別指導を行った。	A
			58	大学入試改革への対策を行う。	(ア)「学びの基礎診断」についての情報収集および対策を進める。 (イ)小論文および志望理由書指導体制を確立し、実施する。	(ア)クラッシーによるアンケート配信を活用し、ポートフォリオ作成を促している。 (イ)9月に高校1年生において、ベネッセコーポレーションの「思考力、判断力、表現力テスト」を試行的に実施した。 (ウ)高1において、思考力・表現力を養うために小論文ガイダンスを12月に実施した。	B
	情報図書部	情報管理課	59	静岡県「ICTを活用した教育」推進計画を参考に、法人の新高校整備計画・情報セキュリティ基本方針・インフラ整備提案依頼書などに従った情報システムを構築していく。	(ア)新インフラの環境整備・・・生徒用のPCを十分に活用できるようにする。 (イ)AppleTVの整備・・・普通教室で使用できる教員を20名以上にする。	(ア)昨年度普通教室でも使えるように導入した生徒用のノートPC40台+タブレット40台は通常の授業中だけでなく、放課後や土曜授業などでも十分に活用されている。 (イ)AppleTVが接続中に切れることがたびたびあった。混線の影響だと判明したため、使用している周波数などを変更して対応できた。 (ウ)今年度中に教員iPadを一新する。	B
			60	ICT環境の整備をし、各々の情報を活用する能力を高める。	(ア)成績データ・Classiの管理・・・学年ごとの分担できめ細かく対応する。 (イ)研修を20回以上実施する・・・機器活用のための情報を会議・メールなどで発信していく。	(ア)成績データ・Classiの管理については、学年ごとに分担を決め、きめ細かく対応出来ている。 (イ)全体研修1回に加えて、Classiへの会議参加は10名以上、また課内研修3回など、メール等で全体へ情報を提供している。 (ウ)後期よりSEが配備された。機能しつつある。	B
		図書課	61	読書リテラシー、資料活用のための情報リテラシーの育成。	(ア)中高・新1年生図書館ガイダンスを実施(4月中)し、緑風塾や一般授業(グローバルヒストリー、保健体育、情報教養テクノロジー等)と連携し、図書館授業を充実、活性化させる。 (イ)静岡新聞+日経テレコン、朝日新聞記事DB、Japan Knowledge等、オンラインデータベースの利用啓発と活用を促進する。 (ウ)レファレンスサービスを充実させ、パスファインダーや館内掲示を整備する。	(ア)新入生に対する図書館ガイダンス(4~5月) (イ)図書館利用授業に際して、司書より図書検索の方法のレクチャー、オンラインデータベースの活用指導を行った。(通年) (ウ)県高等学校ビブリオバトル大会(9月・於常葉大学)へ代表2名が出演。3年連続で決勝に進出。	A
	62		生徒図書委員会活動の発展支援。	(ア)図書委員会活動(図書館業務補助、広報、文化祭など)を通じて自主的に本に関わる生徒の活動を後押しする。 (イ)図書委員会による推薦図書の選書推進と、放送、POPなど展示物、掲示物、デジタルサイネージ等を活用し、読書啓発活動を推進する。	(ア)図書委員による店頭選書企画(新規・8月)。約100冊を購入。 (イ)市立中央図書館との共催で「図書委員のおすすめ!」企画(3月)。図書委員による選書とポップの展示。 (ウ)文化祭でのビブリオバトル(校内予選)、チャリティー古書市の開催。	A	
	63		図書館利用活性化のための環境整備と広報活動を充実させ、年間利用の5%増をはかる。(前年度業務報告書資料統計参照)	(ア)「図書館のお知らせ」、掲示、展示、デジタルサイネージでの新着図書の紹介、図書100選などを活用した読書啓発を推進する(ホームページ掲出を含む) (イ)保護者会、説明会、一日体験授業などでの図書館を開放し、理解を促める。 (ウ)SGT等との連携による講演会、ブックトーク、ビブリオバトル等を企画、実施する。	(ア)西側展示スペース、図書館入口での新着本の紹介。 (イ)「図書館のお知らせ」を通しての読書啓蒙、話題や注目本の紹介。 (ウ)図書館入口での月次注目書籍の紹介、カウンター前での時事関連注目書籍の紹介。	A	
	掌	研修課	64	教員自ら授業に対する検証を行い、授業改善を図る。	(ア)授業評価、担任アンケート、保護者アンケートに基づく教員全体研修を実施し、必要に応じて管理職 面接を実施する。 (イ)公開授業週間を実施。また、外部識者を招聘しての研究授業を実施し、授業の講評、検討会をお願いする。 (ウ)初任・若手教員に対して、管理職、教科、学年部などからのサポート研修や助言を積極的に行う。	(ア)7月に授業評価、担任アンケートを実施、10月にその結果を先生方に配布し、教員全体研修において解説を行った。個々の授業改善および生徒の理解に役立つものとなっている。 (イ)6月と11月に授業公開週間をそれぞれ実施。毎日20名程の保護者が来校してご参観いただいた。また、外部識者を招聘しての研究授業を、前期・後期に各教科で実施。アドバイスをいただき、教科指導力の向上につながっている。 (ウ)初任・若手教員に対しての研修を、本年度より新たに実施。校長講話、教頭講話による研修などを行った。また、初任教員に対してメンター役の先輩教員を決め、指導をお願いしている。	A
			65	他校訪問の呼びかけ、様々な校外研修について紹介する。	(ア)教科ごとの他校での授業参観企画を促すとともに、資質向上に資する校外研修を紹介、あるいは自主的研修を奨励し、研修内容を年度末の教員全体研修で報告してもらう。 (イ)他校の授業参観については管理職に相談し、紹介を請う。	(ア)私学教育振興会、県教委主催の研修などに多数の先生方に参加いただいた。また、各教科で駿台、代ゼミなどの研修に参加、報告を部会などであげてもらい専門性を高める機会となった。 (イ)他校訪問については、7月、11月に県外視察に各1名が参加し、計3校を視察してもらった。	B
	研修開発部	学び支援課	66	SGTの外部講師講座は、新しい講座を多く設けるようにし、体験を通して学ぶものから学術的なものまで広く提供するように努める。	(ア)体験学習型の講座を多く設置し、公的な作品発表の場を用意する。 (イ)宗教学を含む人文学講座を新たに開設し命について考える機会を設ける。 (ウ)大学や研究機関、地元の知識人・有識者の出前授業を積極的に企画・活用し、学校外で受講する講座も積極的に取り入れる。	(ア)Global人材育成のため世界とつながる研究または活動をしている県内の方を講師に招き、講演だけでなく講師との質疑応答の時間に重きを置く『Global Communication』を9月と1月の2回開講した。講師との対話に重点を置き、参加者一人ひとりが講師と向き合う双方向の講座とし理解を深めた。 (イ)伝統文化を学ぶ講座として食文化に注目し、和菓子をテーマに『季節の和菓子～練り切りに挑戦しよう!～』を中高生を対象に7月に実施した。講師として清水区の老舗和菓子店竹翁堂の菓子職人植手元昭氏を講師に迎え、練り切りの歴史と身近な道具を使った装飾技術について調理実習を交え学んだ。 (ウ)食育講座の一貫として『食べ物で健康になろう!』を2月に実施した。講師にRyu Medical Cookingの管理栄養士小川侑子氏を迎え、噛む食事と脳の発達をテーマに「よだれ鶏」と鯖缶を使った「つみれ汁」の作り方を座学を交えた調理実習を通じて学んだ。また生徒だけではなく、保護者にも参加を認めた。	A
			67	SGT内部講師講座は、授業の枠を超えた分野の教養系講座をなるべく多く設置し、生徒の授業以外の学びを支援するように努める。	(ア)JMOCGの新規講座が出ていないか点検し、対応可能な先生がいるかどうかを学び支援課で検討し、教科を通さず直接打診する。 (イ)やる気のある生徒を登壇するため、教室室内をカラー印刷とし、少人数でも対応する。 (ウ)放送を使った生コマースによる宣伝、SGT blogでの情報発信を活発に行い、参加への勧誘を行うと同時にSGT掲示板を積極的に活用する。	(ア)中学生対象のEnglish campと合わせてEnglish Camp Teaching Assistantを実施した。対象を英検準2級以上を取得した高校生とし、主に一貫生で中学時に英検準2級以上を取得した高校生の英語によるCommunication能力UPを図る講座として8月と12月に実施した。 (イ)農業体験講座は、中高生を対象とした講座であるが、一貫生の参加者が多い。毎月第2または第4土曜日に学校バスを使い、清沢の棚田で元静岡大学農学部名誉教授中井弘和先生のご指導の下、田の生態系や米の品種による味覚の違いまた現在の農政について学ぶ講座として来年度も実施する。 (ウ)『Balloon Art』、『Stained Glass Art』、『法教育講座Part1&Part2』、『財務大臣になって日本の財政について考えてみよう!』、『陶芸講座』、『Global Communication』等中高生を対象とした特色系講座を増やし、興味・関心がある講座については、極力参加出来るように配慮した。	B
68			一貫の生徒が6年間通じて参加出来る講座を設置する。	(ア)探究系の内部進学者で英検準2級を取得した生徒、探究系でJWACS語学研修に参加した生徒を対象としたEnglish Camp Teaching Assistantを引き続き継続する。 (イ)中高一貫出身でNPO活動に従事する卒業生を講師とした中高生を対象の講座を計画する。 (ウ)Classiのアンケート機能を活用し、農業体験講座のような中高生が体験的に取り組むことが出来る新しい講座を1年かけて立案する。	(ア)『中学生のための数楽講座』を本校理事で前校長である石田先生をお招きし6月に実施した。中学1年生が20名、中学2年生が5名、高校2年生が1名飛び入りで参加し、碁石やマスを使い、確立の問題について解説いただいた。 (イ)中学1年生対象の『和文化』では、囲碁・将棋・かるたのほか、踊りを取り入れた。音楽の三浦教諭にお願いし、郡上八幡で毎年踊られる郡上踊り(10種)を選択科目に入れ、年間を通じて木曜日の和文化実施日の7限にご指導いただいた。 (ウ)杉山実教諭・重松教諭による『金曜ロードショー』を今年も開講していただいた。良質な映画を鑑賞しながら主人公の生き方や哲学から自分の生き方について振り返り、思索する内省的講座として定着しつつある。毎年楽しみにしている生徒もおりリピーターとなる生徒もいる。	B	

事務局	総務課	69	財務状況の改善(計上済み予算の削減を図る)	(ア)計上済み予算であっても、事業の重要度及び優先度を再確認し、実施の是非を検討する。場合によっては事業の見直しや次年度以降へ繰越を行い支出の削減を図る。 (イ)見積合わせ等の実施を徹底し、支出の削減を図る。積極的に補助金や助成金などに申請を行い、収支の改善を図る。 (ウ)15,000千円の削減を目指す。※削減額の15,000千円は事業活動収支改善と資金収支の施設・設備関係支出削減を合わせたものとする。	(ア)計上済み予算の再確認を実施し、内容を精査したうえで事業の縮小、取り止め及び次年度以降に見送りなどを行った。 (イ)見積合わせの徹底に努め、見積合わせを実施しないものについても可能な限り値引き交渉を行った。また、予算に計上していない補助金の申請を積極的に行った。 (ウ)平成30年度決算見通し(1月実績現在)では達成の見込み。	A
		70	施設・設備の維持、管理の徹底(老朽化設備、備品への対応や安心安全の確保)	(ア)移転後7年が経過し、施設・設備の老朽化が目立ってきた。また、メンテナンス不足となっている部分もある為、メンテナンスや修繕、更新が必要な箇所を洗い出す。 (イ)生徒の安心安全の確保の為に施設・設備について出来る事を洗い出す。 (ウ)状況やコスト等を考慮し、優先順位を決め、今年度出来るものは実施する。また、今年度出来ないものは実施時期を検討し、来年度予算及び中期計画等に盛り込み計画的に実施をしていく。	(ア)及び(イ)各担当へ確認を行い問題点の洗い出しを実施した。 (ウ)今年度予算で対応可能なものや日程の調整が出来たものは実施し、出来なかったものは来年度予算に計上する等の対応を行った(谷田グラウンド部室、体育館フロアメンテナンス等)。また、大規模なものや再来年度以降実施予定のものは中期計画への計上を行った(学校グラウンド人工芝張替え等)。	A
	学務課	71	学務業務の適切な運用、業務効率化の促進。	(ア)学納金収納・返金業務の安定的運用。奨学金との関連付け。 (イ)就学支援金・給付金・授業料減免に関する作業手順の整備。 新規の中学修学支援実証事業費補助金、増加傾向にある各県・企業等奨学金の扱い検討。 (ウ)業務マニュアル整備による、個々の業務(内容・質・量)の把握。	(ア)延滞者の状況の把握に努め、奨学金や授業料減免(県私立学校経常費補助金)とも関連付けて相談に対応した。 (イ)作業手順の整備はできており、早めの対応ができています。各々の扱いは、履歴を明確にして迅速に対応している。 (ウ)業務効率化のための事務室配置換えを実施。引き続き個々の業務の把握→効率化に努める。	A
		72	高校:170人の単願受験者確保。中学:100人以上の受験者を得る。	(ア)各説明会、体験入学、相談会への参加を奨励し、本学の良さを面談を通して働きかける。 (イ)特待生Sの創設。 (ウ)前年度の分析による活動計画。夏休み前の積極的活動。ひとりひとりに届く学校案内・チラシ・HPの充実。小学生向けの分かりやすいリーフレット新規作成。	(ア)(イ)静岡県太地区の中3生が400人減少する状況において、ほぼ定員確保。他校に比べ、静学の受験者が60人の減少で済んだのは特待制度によるものと思われる。説明会においても特Sの手応えはあり、特S効果が感じられる結果となった。 (ウ)前年度の分析による活動、アンケート結果で効果の高い広報を実施。ひとりひとりに届く資料に重点を置いた。	A
		73	Web出願システムの検討。	(ア)説明会への参加。本学教職員向けでの説明会実施。 (イ)日大三島(導入済み)、東海大翔洋(今年度導入)等、他校の情報収集。	(ア)Web出願システムmiracompass主催の説明会および今年度導入の静岡北高校での説明会に参加。また本校職員向け説明会を実施。 (イ)miraikompass導入校の募集要項を取り寄せて内容を確認。実施に向けて関係業者の打合せも実施している。	A